

## 自然の摂理に基づいた林業技術を現場で実践

### ●鋸谷 茂

第29回・2004年受賞。健全な森林空間を取り戻しながらも、良質の材を生み出す環境保全型間伐・育林法の開発・普及

#### 「森と木の研究所」を立ち上げ 食っていける林業の証明

山崎記念農業賞を頂いた頃は福井県の公務員(林学職)をしておりました。公務員をしていた昭和50年代中頃から、全国どこへ行っても「林業は厳しい。食っていけない」という声しか聞こえてきませんでした。しかし、当時から私の林業に対する感覚は違っていました。林業関係者は林業が厳しいと訴えながら補助金のぬるま湯に浸かって、林業技術や作業システムの改革を怠っている。これらの改革を行なえば他産業の労働者と同じ稼ぎが得られると確信しておりました。

公務員生活も50歳を超えた頃から徐々に林業現場から遠ざかり、公務員をしながら林業技術などの改革を実践することが難しくなりましたので、林業界の中で最も厳しい立場に自分自身を置いて、私の林業技術を実践し他産業の労働者と同じ稼ぎが得られることを実証すれば、林業関係者も改革の必要性を認め、林業改革を少しでも前に進めることができるのではないかと、56歳で公務員を辞め林業の現場に入りました。

公務員を辞めた1年目は森林組合の下請けで間伐材生産を行なっている会社に籍を置き、2年目からは「森と木の研究所」を立ち上げ、林業界では最も歩の悪いと云われる森林組合の下請けにポジションを置いて、3名の社員を雇用し間伐材生産の業務を行ない、今も公務

員時代と変わらない稼ぎを確保しております。

「森と木の研究所」の業務は数百ヘクタールを1団地と捉え、そのエリアのスギ・ヒノキ大径材と広葉樹の択伐材を視野に入れた、世界水準の規格を持つ木材搬出路を張り巡らし、今は間伐材を主にした木材生産を行なっております。この取組みによって、施業区域内の森林所有者の意識は「山は負の資産」から「山は負債でない」の感覚に変わってきました。この取組みが周辺地区に波及し、集落単位での木材搬出路の作設と間伐材生産が行なわれております。

#### 広まるスギ皆伐・広葉樹植栽への疑問

最近の林業界で気になるのが広葉樹の植栽です。首都圏周辺のスギ林では、花粉症対策としてスギ林を数ヘクタール単位で皆伐し、その跡地に広葉樹を植えている現場をよく目にしますが、これほど馬鹿げた森林管理はありません。

花粉症の原因はスギだけにあるわけではありません。スギがたくさんある田舎よりも、都会のほうが花粉症の人の割合が多いことがその証拠です。大気に含まれる細かいダストによって花粉が傷つくと、中のアレルゲンが出やすい状態に変化したり、排気ガスから出た微粒子が花粉に付着することで抗原性が増したりするためと言われています。それなのに、スギを悪の元凶であるかのごとく敵視して全面的に伐ってしまい、広葉樹に植え替え

る。こんなナンセンスな森林管理は許されるべきではないのです。

今あるスギをすべて伐って広葉樹を植えるというのは、防災上、大変危険なことです。なぜなら、現存するスギの根が持っている土砂の崩壊防止機能を見捨てているからです。スギを伐ってしまうと同時にスギの根は枯れ、細い根から順に腐っていきます。7～8年もすれば土砂を安定させる根はほとんど腐り、土砂の崩壊防止機能を失います。

広葉樹を植えても伐採前のスギ林と同じ程度の機能を果たすまでには20～30年がかかり、スギを伐採した後、広葉樹が大きくなるまでの20～30年間、山の土砂は非常に崩れやすく危険な状態にさらされるのです。その間に土砂崩壊があったら、誰がどんな責任を取るのでしょうか。これを勧めた関係者はだれも責任すら感じないことでしょう。

### スギ伐採跡地にみる自然の摂理

スギの伐採跡地では、土に埋もれた草や木の種が一斉に芽吹き、多くの場合タラやカラスザンショウなどのトゲのある初期成長の速い広葉樹が発生します。これらの広葉樹は山に杭を打つように地中深く根がまっすぐ伸び、伐採跡地の土砂の崩壊防止に高い機能を発揮します。自然界は伐採跡地を安定させるために、その土地に最適の植生を自然発生させるのです。

この自然の摂理を理解せず、人間中心で自然に対し軽薄な知識しか持たない現代人は、人間の行為が自然の摂理よりも優れていると思込み、スギの伐採跡地に広葉樹を植えたがります。伐採跡地にサクラ、モミジ、シイ、カシ、ナラ、ブナなどの広葉樹を植栽しても、その土地に最適の植生として自然発生する樹木の成長が速いため、植栽した広葉樹の成長に邪魔だと、自然発生したタラやカラス

ザンショウなどが持つ土砂の崩壊防止機能などを無視して、その土地の最適植生を下刈りし全て刈り取ってしまいます。

このことが土砂崩壊を発生させる大きな要因の一つであり、自然の植生が持つ土砂安定の機能をもっと重視すべきなのです。しかし、林学者と言われる人までがこの自然の摂理を理解せず広葉樹植栽を進めていることが多いのが現状です。

### 「広葉樹 育てる賢人 植えるバカ」

真に、地域の森林環境の保全を考えるのであれば、スギ林を皆伐するのではなく、現在のスギ林が持っている土砂崩壊防止等の機能を維持しながら徐々に広葉樹林に誘導すべきです。具体的には、幹の太いスギを残し現存本数の半分まで細いスギを間伐します。すると、必ずその山に最適な広葉樹が自然に発生します。その後は10年に1回ずつ、スギ林の本数が半減するように間伐します。こうすれば、山は安定した状態を維持しながら広葉樹林へと移行できるのです。

シイタケ原木の生産を目的にクヌギやナラなどを植栽するのは合理的な森林施業ですが、ただ広葉樹林を造りたいと「スギをゼロにしてイチから別のことを始める」という方法は、森林保全の考え方にはなじまないものです。実際、伐採跡地に植えた広葉樹が50年以上健全に育った例を私は1ヵ所しか見たことがありません。

広葉樹を植栽しても下刈りが終わった後に自然発生する広葉樹に、植栽した樹木は負けてしまうのです。皮肉なことに、下刈り後に自然発生した広葉樹が育ったおかげで「いい山になった」と言うのはよくあることであり、広葉樹は自然発生した木を育てればよいのです。

だから、私は言います。「広葉樹 育てる賢人 植えるバカ」。